

木曾路
『夜明け前』探究
文献の旅

北小路
健

著者略歴

きたこう じ けん
北小路 健

1913年生まれ，本籍・東京都

東京文理科大学国語国文学科卒業（1937年）

教壇生活，研究所生活を経て著作活動に入る

主なる著書は，「源氏物語従一位麗子本の研究」，

「源氏物語律調論」，「喇嘛教本尊仏の研究」，「詩集・穢土寂光」，

「自由を求めて——福島事件」，「遊女—その歴史と哀歓」など

現住所 東京都足立区六月2—23—3

検印省略

UNSODO

木曾路 文献の旅

1,200 円

1970年7月1日印刷

1970年7月15日発行

著 者 北小路 健

発行者 本田義太郎

株 式 芸 艸 堂

東京都文京区湯島1-1-9

京都市中京区寺町二条南

©1970

猪瀬印刷・丸山製本

木曾路文献の旅

『夜明け前』探究

序 文

島崎藤村の『夜明け前』は、中山道の木曾の宿場馬籠に舞台の中心をおき、藤村の父親と見られる青山半蔵を主人公に、幕末から明治の初年にいたる大変革期に於ける日本を、草莽そうもうの人々の眼をつつみ込んだ眼界をもって描きだした日本近代文学の傑作であり、この七〇年代の激動限りない時期を迎えて、一層その真価をあらわして来る作品である。

この『夜明け前』については幾多の作家、批評家の批評、評伝また文学者の研究、資料発掘が行なわれている。そしていまやこれらの研究も、その頂点にいたりえたのではないかと考えていたが、いまここに私は北小路健氏の『木曾路文献の旅「夜明け前」探究』を見ることとなり、まったく新しい『夜明け前』研究の一つの大きな石が置かれたのを知らされた。

北小路健氏は昭和十一年、大学生であった頃一度藤村にじかに会っているが、敗戦直後、『夜明け前』にその後の自分を決定する書として新しい出会いをして

いるのである。太平洋戦争敗戦後のきびしい時代に北小路健氏が『夜明け前』をあらたに見出したその眼を、私は何よりも尊重したいと思う。北小路健氏はその後、その眼を失うことなく、長い年月にわたり『夜明け前』ととりくみ、『夜明け前』研究、そのぼう、大な根本的資料の追求に生涯をかけたのである。

私もまた先年木曾の馬籠をたずね、『夜明け前』について一文を書いたことがあるが、今度の北小路健氏の『夜明け前探究』によって、これまで知ることの出来なかった多くのことを得、『夜明け前』のなかに深くはいることができることとなった。私はこの書物が一九七〇年というこの年に出版されることに大きな意味を見出す。

野間 宏

目次

序章

9

第一章 木曾の道中―華麗な道行き―

17

貴人たちの興入れ 和宮御降嫁の経緯 わきたつ中山道
七代目・市川団十郎の手紙 判鑑・印鑑

第二章 木曾の道中―苛酷な監視―

73

女手形 十曲峠の石畳 山中薬師医王寺 狐膏薬の伝説と
史実 医王寺へ御下賜金二両 鉄砲手形

第三章 『夜明け前』のモデル達

115

蜂谷香蔵のモデル・間秀矩の『東行日記』 間秀矩と老女花園
林勝重のモデル・鈴木弘道(1) 島崎正樹・「猷扇事件」後の新
資料 林勝重のモデル・鈴木弘道(2) 島崎正樹の自筆歎願書

第四章 翁塚建立―崙左坊・古狂の発掘―

161

俳諧宗匠・崙左坊の新資料発掘 崙左坊の伝記 翁塚開眼供養
の資料 新たに発掘された翁塚開眼供養句集 大脇古狂の正体
木曾の蠅 馬籠八景の図

第五章 天狗党・赤報隊

200

天狗党の動静を伝える書簡・その一―松尾誠哉 天狗党の動静を
伝える書簡・その二―島崎正樹 天狗党の動静を伝える書簡・そ
の三―間秀矩ら 赤報隊と相楽総三 相楽総三の行動に関する
新資料

第六章 忘れられた国文学者

249

忘れられた林彦右衛門 島崎正樹と林彦右衛門 『夜明け前』
の冒頭の文の出典

あとがき
略年表

第一章

第二章

6

第三章

- 25 『東行日記』表紙
- 26 『東行日記』一
- 27 『東行日記』二
- 28 『東行日記』三
- 29 『東行日記』四
- 30 『東行日記』五
- 31 『東行日記』六
- 32 島崎正樹書簡封筒
- 33 島崎正樹書簡全文
- 34 島崎正樹歎願書自筆原稿
- 35 大奥老女花園書簡
- 36 間秀矩自筆長歌

間 孔太郎氏
 間 孔太郎氏
 間 孔太郎氏
 間 孔太郎氏
 間 孔太郎氏
 間 孔太郎氏
 間 孔太郎氏
 間 孔太郎氏
 間 孔太郎氏
 出原守夫氏
 間 孔太郎氏
 間 孔太郎氏

第四章

- 37 『花雪集』(嵩左坊自筆)
 - 38 於力安産之刻諸事覚並七夜祝儀
 - 39 『円誉融徹居士追善集』(嵩左坊自筆)
 - 40 『大黒屋日記』一
 - 41 翁塚開眼供養句集
 - 42 『大黒屋日記』二
 - 43 大脇古狂辞世句
 - 44 嵩左坊画像・賛
 - 45 嵩左坊自筆懷紙
 - 46 『大黒屋日記』三
 - 47 翁塚拓本
 - 48 馬籠八景(嵩左坊自筆)
- 落合公民館
 渡辺貞子氏
 落合公民館
 藤村記念館
 大脇 珠氏
 藤村記念館
 大脇 珠氏
 鈴木いく氏
 大脇 珠氏
 大脇 珠氏
 藤村記念館
 馬籠新茶屋
 大脇 珠氏

第五章

- | | | |
|----|----------------|-------|
| 49 | 松尾誠哉書簡 | 市岡楯子氏 |
| 50 | 島崎正樹書簡 | 市岡楯子氏 |
| 51 | 間秀矩書簡 | 市岡楯子氏 |
| 52 | 『宿駅取締日記』表紙 | 落合公民館 |
| 53 | 『宿駅取締日記』一 | 落合公民館 |
| 54 | 『宿駅取締日記』二 | 落合公民館 |
| 55 | 『宿駅取締日記』三 | 落合公民館 |
| 56 | 『大江戸日記』 | 落合公民館 |
| 57 | 『将滿遺草』(相楽総三歌集) | 市岡楯子氏 |

第六章

- | | | |
|----|--------------|-------|
| 58 | 小学義校孜孜舎開業願書一 | 渡辺貞子氏 |
| 59 | 小学義校孜孜舎開業願書二 | 渡辺貞子氏 |
| 60 | 『祝詞抄』 | 井口弘文氏 |

- | | | |
|----|-------------|-------|
| 61 | 『祝詞抄』奥書 | 井口弘文氏 |
| 62 | 『神名帳』 | 井口弘文氏 |
| 63 | 『万延二年頭書雜日記』 | 玉置忠平氏 |
| 64 | 『山陵志』 | 落合支所 |
| 65 | 『山陵志』奥書 | 落合支所 |
| 66 | 『出定笑語』 | 落合支所 |
| 67 | 林彦右衛門文庫藏書目錄 | 落合支所 |
| 68 | 『純正蒙求』 | 落合支所 |
| 69 | 『純正蒙求』奥書 | 落合支所 |
| 70 | 林彦右衛門文庫藏書 | 落合支所 |

序章

「木曾路はすべて山の中である。」という一文は、島崎藤村の『夜明け前』の冒頭として有名である。

木曾路をふくめて中山道なかみちどう六十九宿に、文献を求めての旅をはじめてからまる五年になるが、その旅は、平均一週間ずつ三十回をはるかに越えた。それらはすべて『夜明け前』を深く味わい、歴史と文学とのかかわりを通して、幕末、維新の動乱期を生きた人間を、わがものとして考え直してみるための勉強に外ならなかった。

私と『夜明け前』との出会いは、終戦直後にさかのぼる。私は満州の文化研究所員として、終戦を新京で迎えた。敗戦国民として、日本人は日増しに薄汚れ衰弱した。私はソ連軍進駐の日、家を接収されて追い出されると同時に、一万三千冊の蔵書を焼き払われた。その中には、稀覯本きこうほんとして斯界しかいに知られていた古い写本類や、自分の著書などもあったが、総じて和本はたちまちに燃えあがり、洋本も翌朝まで薄い煙をあげてはいたが、すべて灰に帰した。私の身边には、本と名のつくものは、一冊も残らなかった。かつて考えてもみなかったどんでん返しの中で、私は「愛惜」「寂寥せきりょう」「憎悪」「虚脱」……あらゆる表現をもってしてもなお足りぬ、残った想いにひしがれた。応仁・文明の大乱に焼き滅ばされた多くの文化財に涙した好学の諸士や、始皇帝の焚書坑儒の暴挙に恨みをのんだ文人達の心根が、まさに自分のものとして実感された。

終戦を境にして、新京は長春と改称されたが、そこで一年間の敗戦生活中、私は掠奪をまぬがれたわずかの衣類を立ち売りしたり、行商の真似事をしたりして食いつないだ。

日本人は、あらゆるものを売りつくしたようだ。身売った女もいたし、子供を売った親さえいた。明日の命がわからなかった。漠然とした死の影におびやかされながら、一様に、ともかくも生きのびようと必死であった。

——ときおり、狂おしいほどの望郷の想いに襲われながら。

しかし、海を渡らなければ、日本の土は踏めないという厳然たる事実^{じじつ}に想い至ると、望郷の想いは絶望に突きあたった。

街道に薙^{ひしろ}を敷き、そこに蔵書を並べてたたき売りする素人本屋の前で、ある日行商帰りの私は『夜明け前』を見つけて買った。

私はこの本を、昭和十一年の初夏、まだ大学生の頃に通読した経験がある。藤村はこの『夜明け前』を、昭和四年四月から十年十月にわたって、年四回のわりで『中央公論』誌上に発表し、十一年一月には朝日文化賞をおくられ、三月には、村山知義脚色、久保栄演出で新協劇団によって上演された。大学の講演部が主催する年一回の文化講演会に、藤村を招こうという案が出たのは五月に入ってからであった。

私は交渉委員として、森岡学長の添書^{てんしよ}をたずさえて、飯倉片町に藤村をたずねた。玄関の畳に正座した藤村は、添書に目を通すと、「ご趣旨はよくわかりました。数日中に学長さんあてに御返事するということで、きょうのところは……」

と、静かな声で言った。私はそのまま玄関先から引き返した。耳にしていた「冷たい感じの人間」という気はしなかった。和服の膝の上に組んだ骨ばった長い指が印象的であった。それは『夜明け前』を生んだ指であったし、『新生』の女主人と相擁した手でもあった。

承諾の返事が来てから講演の日まで、約一カ月ほどあったと思う。私はその期間に、途中までで投げ出しておいた『夜明け前』を、はじめから読み返した。これが通読第一回目であった。

講演当日、私は学校差し向けの車で迎えに行った。藤村は、袴姿で、小さな風呂敷包みを持ち、車の奥にすわった。私はなるべく離れて座席の隅に位置した。走りだしてからよほど経って、

「御專攻は」

と、思いがけぬ質問があった。私は『源氏物語』だと答えた。藤村はすかさず、

「『玉の小櫛』は立派な本ですね」

と言った。『玉の小櫛』のことは、『夜明け前』の中でも藤村は触れている。私は萩原広道の『源氏物語評釈』も、すぐれた著作だと思うと、卒直な感想を述べた。

「ああ、あれは良い本です。花宴巻で中断したのは、いかにも残念です」

と、藤村はすぐ反応した。私は、彼の古典に対する広い知識に、正直のところちょっと驚かされた。『夜明け前』執筆の準備のために、藤村が平田篤胤の著書や平田学派の人々を入念に調べたことは当然だが、広道の著書などまで知っていることが、『源氏』專攻の一学生であった私にしてみれば、圧倒されるような博学振りと受け取れ

たのである。

かなり長い車中で、まだ外にも対話があったように思うが、今となつてはすべて記憶にない。ただ前記の問答だけが、きわだつて私の胸にある。

私は、うらぶれた敗戦国民として、再び『夜明け前』と巡り合い、読み進みながら、藤村との奇しき出会いを想起した。その藤村も、敗戦を知らずして、すでに昭和十八年八月二十二日に七十二歳で他界していた。

『夜明け前』に描かれた木曾路の冬は、私をして酷烈の思いをかきたてさせると同時に、晩春初夏の候、一時に新緑に色どられる谷合いの、心を奪うばかりの鮮麗な風景は、切ないほどの憧憬をかきたてた。

「国破れて山河あり」とは、陳腐なことばである。しかし、毎日の敗戦の生活が陰惨であればあるほど、私は、まだ一度も足踏み入れたことのない木曾路にひかれた。

「『夜明け前』を深く理解するためには、当時の宿駅制度や歴史の裏側に生きた人々の生活や習俗や……さまざまなかたちを、私はもっと詳しく知りたいと願ったし、何よりもまず、命あって日本の土を踏むことができたなら、必ずこの足で木曾路を歩きたいと念じ、いまだに残るであろう宿場の旧家をおとずれて、囲炉裏のそばで歴史そのものを実感したいと、しきりに思いつづけたものだ。

同時に、『源氏物語』を生涯の研究課題のつもりでやって来た私は、満州という異郷での敗戦生活の中で、日本近代史の探究なしに、新しい変転の時代に処することの不安を感じた。——良民のつもりで、安心して暮らしていた私どもが、終戦の瞬間から、もはや国の保護など一切期待できぬ泥沼に放置されたという思いもかけぬ

運命は、日本の近代史が内包していた誤謬ごびやうと罪惡に根ざしたものにちがいないという発想が、私の中にあったからである。

しかし、幸いにして終戦一年半の後、無事帰国できた私に、すぐに木曾路を目指す余裕などはなかった。

不本意な身過ぎ世過ぎの中で、まず明治自由民権運動史の探究のために十数年を費し、そこで目をひきつけられた虐げられた人々への強い関心から、最下層の遊女、売女の歴史探究に更に年月をさき、その後ようやく、私は念願の木曾路に入った。――すでに木曾路は、年とともに旧態を變じつつあった。このわずか五年の間にさえ、その変貌は加速度的になされつつある。それと平行して、木曾路についての観光手引き書風の刊行物は、おびただしい数にのぼっているが、私の目指したのは、諸所に残っているであろう文献を通して、木曾路を知ることであり、人がすでに書いた宿駅制度や交通研究の鵜呑みでなしに、生の残存資料によって、それを確かめ、一歩一歩『夜明け前』に迫ってみる道であった。

『夜明け前』は言うまでもなく、藤村が、その父島崎正樹（作中の青山半蔵）を、幕末、維新の大動乱の時代に浮き沈みした人物として捉え、人間と歴史とにわたって展開した歴史小説である。ある論者は、島崎正樹を青山半蔵とすることによって、その伝記小説を意図したのが『夜明け前』だという。またある論者によれば、それは、日本の大きな転換期における歴史を、藤村自身が生きた昭和初期の実感と重ねあわせて描こうとしたもので、その具体的な視点として、青山半蔵が主人公として登場したのだという。更にまた、鴎外の史伝小説が目指した歴史そのままを、この作品の本旨としたものにちがいないという人もいる。

たしかに『夜明け前』は、波瀾に富む半蔵の生涯を描いた部分と、事実としてすでに記録されている歴史的記述の部分とが混在していることは、すでにいわれて来た通りであり、これを「詩」と「歴史」と名づけた人もいる。実は私は、「詩」といわれる半蔵の劇的な生涯を描いた部分にも更に光をあててみて、島崎正樹の生涯の事実と対照し、藤村がその事実をどこまで追い求め、そしてそれを「詩」として描きあげたかをも探究してみなければならぬと考えた。そして私は、一つ一つ正樹の身辺や、小さな宿駅に展開した実相の資料を発掘して行くにつれて、藤村が見事に描いた「詩」の部分の秘密に触れる思いを強めたのである。

登場人物は、実名でも出て来るし、仮名でも出て来る。私は、かつて実在したこれら多くのモデル達（主として仮名の）身辺にも調査の手を伸ばした。それは、藤村が事実をどのように見たかの問題、創作の虚構性の問題——つまり、歴史と文学とに対処した「作家・藤村」を探り当てたい願いからに外ならない。

記録、文献の類は、多くは、旧家と称せられる人々の手許にある。そしてそれらは、かなりの程度まで研究家の目に触れてもいる。しかし中には、すでに散って諸所に転々流出したものも少なくはないし、また無残にも切られて襖の下張りとして姿を没したものもあるう。だが私は、見得べくしてなお埋もれているにちがいない資料のわずかすを夢見て追いつづけた。

幸いにして、それはあった。——かび臭い蔵の中に、埃だらけのつづらの中に。それらの多くは、昔の宿役人、村役人の手に成る書き物であり、役目上書き記したものが多く、その中に『夜明け前』のモデルに直結する人物の片影があったり、藤村自身が準備期時代に実見した上で資料として作中に用いたものでありながら、その後